５　首都圏の若者との交流拡大の可能性を考えるシンポジウム開催

１）シンポジウムの開催内容（アンケート等の実施を含む）の整理・提案

①実施計画

○シンポジウム開催の目的

下北地域に居住する世代のうち、少ない世代となる大学生世代の目線から、冬場の観光資源を探ってもらい、冬季における観光資源の可能性について検討・提言する。首都圏の大学生による調査をもとに、首都圏の学生を下北地域へ呼び込むための方策を検討する。

大学生は、調査という視点を持ちつつ、下北地域の観光資源を体験したうえで成果をまとめる。その成果をシンポジウムにおいて発表する。シンポジウムは下北地域と首都圏の２ヶ所で開催する。

下北地域で発表することにより、大学生が持つ視点を下北地域の利害関係者に提示する。また首都圏でも開催することにより、下北地域の発信力強化の一助となるようにする。

また、今後実施が予定されている夏場の観光資源調査での比較検討資料とする。

○シンポジウム開催概要

・「首都圏大学生との交流事業 in 下北　成果発表会（シンポジウム）」
　日時：２月 22 日（金）　10:00～12:00
　場所：来さまい館（青森県むつ市）
・「下北地域と首都圏大学生との交流事業成果発表会（シンポジウム）in 首都圏」
　日時：３月８日（土）　14:30～17:00
　場所：財団法人地域開発研究所会議室（東京都文京区）

2）地域シンポジウムの準備・開催・とりまとめ（開催地：下北地域）

首都圏大学生との交流事業 in 下北　成果報告会（シンポジウム）　要旨

■ 日　時：2008 年 2 月 22 日　10:00～
■ 場　所：むつ市来さまい館イベントホール
■ 発表者：法政大学学生、立正大学学生、高崎経済大学学生

○式次第

1．開式・青森県下北地域県民局　局長　奈良岡修一氏挨拶
2．趣旨説明と学生紹介
3．学生発表および提案
4．意見交換会

○学生発表要旨

1班：河野康乃、田中里絵(法政大学社会学部 2 年)、高橋紘子(同 4 年)、
菊池恵美(現代福祉学部 2 年)

1－1．体験メニュー

・2月19日：むつ市から路線バスにて大間崎へ。本州最北端の地見学。エスコートクラブがお迎え。漁協にて漁船見学、漁師から話を聞く。昼食にマグロ丼を食べる。午後、べこもち作り体験。路線バスにて下風呂温泉へ移動。公衆浴場「大湯」に入浴、その後路線バスにて易国間へ移動。わいどの家に宿泊。
・2月 20 日：わいどの木にて木工体験、夕方路線バスにてむつ市帰着。

1－2．各プログラムの魅力・問題点

○魅力

・大間：エネルギッシュなかっちゃ達【OEC、こすもす】、おいしいマグロ丼【OEC】、４社の旅行会社との契約【OEC】、伝統を学ぶことができる【こすもす】、べこもちをその場で食べられる【こすもす】
・下風呂温泉・わいどの木：地元の人がフレンドリー【下風呂】、マニア向け【下風呂】、わいどの家が感動・おしゃれ【わいど】、大人数でも泊れる【わいど】、ヒバのお風呂、カラオケ【わいど】、自由な発想の木工体験【わいど】

○改善点

・大間：金額【OEC、こすもす】、食事をする場所【OEC】、土産屋が入りづらい、時間の余裕がほしい【こすもす】
・下風呂温泉・わいどの木：パンフレットとのギャップがありすぎる【下風呂】ドライヤー・シャンプーなどの備品について【下風呂】、温泉？？女子大生向きではない【下風呂】、作業服、軍手の連絡【わいど】、詳しい説明が欲しい【わいど】、泊まって体験か、体験して泊まるか？【わいど】

○提案

・大間：使われていない施設の活用【OEC】、視覚資料を取り入れる【OEC、こすもす】、土産屋との連携（OEC がお土産開発）【OEC】、手作りしたべこもちをお土産として（シールを貼る）【こすもす】
・下風呂温泉・わいどの木：下風呂温泉をもう少し観光客向けに（今の素朴な状態を残しつつ…）【下風呂】、宿泊して、２日目に体験でもわいどの家の方々とふれあえる何か【わいど】、雪の演出【わいど】

〇全体を通していえること

・全体的に視覚資料が少なかった（パンフレット、写真、パネルを使ってのガイド etc）、説明（マニュアル通りではないが、行き当たりばったりでもないガイド）、最低限の整備（清潔なトイレ、ドライヤー、暖房、安全）、生活改善グループを支える人々の力、雪の活用、交通→フリーパス券の導入

2 班：佐藤怜奈、関根綾子、藤山良(法政大学現代福祉学部 2 年)、
田花康志郎(立正大学地球環境科学部 2 年)

2－１．体験メニュー

・２月19日：むつ市から路線バスにて脇野沢へ移動。昼食に焼干しラーメンを食べる、クロソイの餌やり、ばおり餅、よもぎ餅作り体験。脇野沢ユースホステルに宿泊、アニマルトラック事前学習。
・２月20日：アニマルトレック、その後路線バスにて釜臥山スキー場へ向かう（最寄りバス停から徒歩）、スキー体験、その後バスにてむつ市帰着

2－２．各プログラムの魅力・問題点

〇魅力

・クロソイ餌やり：漁船に乗ることができ、養殖の仕事の一部を知ることができる。地元の漁師の方々と交流することができる。
・ばおりもち体験他：地域住民と直接関わることができ、実際の生活の様子などを知ることができる。新しい出会いを持つことができる。自分たちが作った料理をその場で温かいまま食べることができる。自分たちでホタテ貝を開き、刺身を食べることができる。**何よりもかっちゃたちが優しかった！**
・アニマルトレック：運が良いと野生動物を間近で観察できる。YHの磯山さんによる事前学習により、動物への興味がわき、生態も理解した状態で山を散策できる。牛の首農村公園からの眺望がとてもよかった。YHの内装がおしゃれであった。宿泊費が良心的であった。YHのペアレントが温かかった。
・釜臥山スキー場：陸奥湾に向かった眺望が最高だった。コースが長い。

〇改善点

・クロソイ餌やり：餌やり体験について事前の説明がなかった。クロソイに関する説明がなかった。餌やりだけでなく、クロソイ料理を味わいたかった。観光商品として受け入れられる体制があるのか。
・ばおりもち体験他：大人数でも対応できるのか。場所の確保はどうなるのか。餅をつくことから始めたい。作業工程の組み立てができていない（その理由は、ホタテ貝の開き作業に手間取ってしまったため、ばおり餅が冷めてしまったなど）。ばおり餅の味の更なる改善。
・アニマルトレック：集客力を十分にもっているモノなので、もっと全国にアピールすればいいと思う。アニマルトラックという性質上大人数のお客さんを呼び込むことは不可能であり、磯山さんし

か案内人がいないという状況も課題の一つであると思う。
・釜臥山スキー場：バス停から遠い。ロッカーがないなどセキュリティ設備があまい。

○提案

・クロソイ餌やり：メインの餌やりは珍しい体験であり首都圏の若年層が楽しめる体験である。メイン＋αの企画を作る（漁協の方による講習、クロソイ料理を味わう）。観光客を受け入れられる体制をつくる。
・ばおりもち体験他：出来立てのよもぎ餅やホタテの刺身、貝焼きはとても美味しかった＝東京都心では滅多に食せない。かっちゃたちの優しさから脇野沢らしさを味わうことができた ⇒人と関わることの楽しさ。地域住民との会話⇒地域らしさの発見。旅行者の好奇心を刺激すること。旅の醍醐味。
・観光資源への発展に向けてハード面とソフト面の整備。ハード面：ある程度の人数が収容できる施設の確保。ソフト面：より充実したプログラムや、きめ細やかな対応、それを観光商品として売り出すことに対する前向きな姿勢の確立。
・アニマルトレック：動物たちの生活様式を崩さないよう努力しながら、アニマルトラックという観光資源を活かし、大消費地へアピールしていったほうが良いと思う。
・釜臥山スキー場：景観は言うことなし、まさに絶景。交通の不便の解消。他の観光資源との抱き合わせ

○全体を通していえること

・「脇野沢ならでは」を学ぶことのできる観光の提案⇒さらに「脇野沢ならでは」の交通機関の確立へ
・各観光スポットが離れているという課題→新たな交通機関の確立は必須
・「脇野沢ならでは」をプラスすると…例えば、かっちゃたちが案内人として、各スポットを回る巡回バスなど

３班：小澤寛樹(高崎経済大学経済学部２年)、荒井順也(立正大学地球環境科学部１年)、古関達大（同2年)、山下貴子（法政大学社会学部２年）

3－１．体験メニュー

・２月19日：むつ市内からタクシーにて大利伝承館へ。そば打ちともちつき踊りを体験。その後タクシーにて原牧場へ。酪農体験とバターづくりを体験。バスにてむつ市帰着。
・２月20日：合同庁舎にて「一日局長」、その後川内漁協へ移動。ナマコ加工とホタテうろ落としを体験。漁協の車にてむつ市帰着。

3－２．各プログラムの魅力・問題点

○体験を通じての課題

・下北での移動に際してレンタカーの存在は不可欠であると感じた。大学生は観光の足となる交通機関の便数が少ないと行きたい気持ちを諦めてしまう→若者が観光地に行くための移動手段の改善が必要。
・一つ一つの体験プランとしては下北らしさや若者にはインパクトにかけるという印象がある。下北の特色が曖昧になってしまっていて、素材をうまく活かしきれていないのではないか→ただし個々のプランの中には若者をひきつける可能性を秘めたものが存在する。

・これらのコンテンツをうまく組み合わせ、PRすれば、下北に若者が興味を示すのではないか！

◯提案

・下北限定「海軍コロッケ」をご当地限定で露天販売などを検討してみる（ソウルフード定着)。・現在使われている移動手段のメリットを生かす。観光拠点となるむつ市にみやげ物屋や伝統料　理屋を展開するなど施設の充実。訪れる人の為に料理店や土産店などのマップを作る（地元住民のおすすめ店を募集・ご当地ラーメンマップなど…)。

◯３班が興味を持ったもの

・「本州最北端の地」のイメージ ⇒　厳しさ、寒さ、荒波…＝刺激的なもの！？（みてみたいー！！）

・地理的条件を生かした観光資源の開発⇒「本州最北端の地」は１つしかない

・「一球入魂かぼちゃ」と「十割そば」から野球が連想された。これには必勝のイメージを持ち、・下北で食べてみるインセンティブになる。「北れ挑戦者」。

○下北地域での発表会資料（パワーポイント）

１班

下北地域冬季体験型観光資源調査

１班（大間町・風間浦村コース）

河野　康乃
菊池　恵美
田中　里絵
高橋　紘子

大間町

大間町①

- 下北駅9：10発→大間崎10：52着
- エスコートクラブ（OEC）の出迎え
  - ・最北端の地で写真撮影
  - ・土産屋でショッピング
  - ・展望台で360°のパノラマ津軽海峡
  - ・漁港見学
  - ・マグロ丼を食す
- 「べこもち」づくり体験
  - ・こすもすの家生活改善グループによるべこもち作り体験

※OEC・・・Oma Escort Club(大間エスコートクラブ)

大間町②

魅力

- ・エネルギッシュなかっちゃ達【OEC、こすもす】
- ・おいしいマグロ丼【OEC】
- ・4社の旅行会社との契約【OEC】
- ・伝統を学ぶことができる【こすもす】
- ・べこもちをその場で食べられる【こすもす】

改善点

- ・金額【OEC、こすもす】
- ・食事をする場所【OEC】
- ・土産屋が入りづらい
- ・時間の余裕がほしい【こすもす】

大間町～提案～

- 使われていない施設の活用【OEC】
- 視覚資料を取り入れる【OEC、こすもす】
- 土産屋との連携（OECがお土産開発）【OEC】
- 手作りしたべこもちをお土産として（シールを貼る）【こすもす】

風間浦村

風間浦村①

- 日和町16:09発→下風呂16:42着
- 下風呂温泉
  - ・入浴
  - ・散策

- 下風呂18:11発→易国間18:24着
  - ・わいどの家宿泊
  - ・わいどの木で木工体験（翌日）

風間浦村②

魅力
・地元の人がフレンドリー【下風呂】
・マニア向け【下風呂】
・わいどの家が感動、おしゃれ【わいど】
・大人数でも泊れる【わいど】
・ヒバのお風呂、カラオケ【わいど】
・自由な発想の木工体験【わいど】

改善点
・パンフレットとのギャップがありすぎる【下風呂】
・ドライヤー、シャンプーなどの備品について【下風呂】
・温泉。。。？？女子大生向きではない【下風呂】
・作業服、軍手の連絡【わいど】
・詳しい説明が欲しい【わいど】
・泊まって体験か、体験して泊まるか？【わいど】

風間浦村～提案～

- 下風呂温泉をもう少し観光客向けに（今の素朴な状態を残しつつ……）【下風呂】
- 宿泊して、2日目に体験でもわいどの家の方々とふれあえる何か【わいど】
- 雪の演出【わいど】

体験を終えて……

全体を通して言えること

- 全体的に視覚資料が少なかった。（パンフレット、写真、パネルを使ってのガイドetc）
- 説明（マニュアル通りではないが、行き当たりばったりでもないガイド）
- 最低限の整備（清潔なトイレ、ドライヤー、暖房、安全）
- 生活改善グループを支える人々の力
- 雪の活用
- 交通→フリーパス券の導入

お世話になった皆さん、

楽しい思い出を

ありがとうございました。（^_^）☆

2班

首都圏の大学と連携した首都圏の若者との交流推進調査

脇野沢地区を訪れて

Team under-North
佐藤怜奈
関根綾子
田花康志郎
藤山　良

2月19日の行程

プラザホテルむつ
↓
脇野沢にて
クロソイ餌やり体験
ばおり餅・よもぎ餅作り体験
ホタテ貝開き方体験
↓
脇野沢ユースホステル

2月20日の行程

脇野沢ユースホステル
↓
愛宕山公園・牛の首農村公園にて
アニマルトラック
↓
釜臥山スキー場
↓
プラザホテルむつ

クロソイの餌やり①　クロソイとは

- クロソイとは
  - ・メバル科の黒い魚である
  - ・脇野沢では昭和58年頃からクロソイの養殖を始めている
  - ・脇野沢の特産品のひとつとして知られている

クロソイの餌やり②　行程

- 漁協組合到着
  ↓
- 港へ移動
  ↓
- ひらめ丸で養殖場へ
  ↓
- 餌やり
  ↓
- 港へ戻る

クロソイの餌やり③　長所

- 長所

・漁船に乗ることができる

・養殖の仕事の一部を知ることができる

・地元の漁師の方々と交流することができる

クロソイの餌やり④　要望

- 要望

・餌やり体験に対して事前説明がなかった。
・クロソイに関する説明がなかった
・餌やりだけでなく、クロソイ料理を味わいたかった
・観光商品として受け入れられる体制があるのか

クロソイの餌やり⑤　まとめ

- メインの餌やりは珍しい体験であり、首都圏の若年層が楽しめる体験である

↓

よりよい観光商品にするためには？

クロソイの餌やり⑥　まとめ

- メイン＋αの企画を作る

・漁協の方による講習
・クロソイ料理を味わう

- 観光客を受け入れられる体制をつくる

ばおり餅・よもぎ餅作り・ホタテ貝の開き方体験①

ばおり餅・よもぎ餅作り・ホタテ貝の開き方体験②

長所
・地域住民と直接関わることができる。
・直接関わりを持つことによって、実際の生活の様子などを知ることができる。
・新しい出会いを持つことができる。
・郷土料理の体験が良い。
・自分たちが作った料理をその場で温かいまま食べることができる。
・自分たちでホタテ貝を開き、刺身を食べることができる。

・何よりもかっちゃたちが優しかった！

ばおり餅・よもぎ餅作り・ホタテ貝の開き方体験③

要望
・大人数でも対応できるのか。
・場所の確保はどうなるのか。
・餅をつくことから始めたい。
・作業工程の組み立てができていない（ホタテ貝の開き作業に手間取ってしまったため、ばおり餅が冷めてしまったなど）。
・ばおり餅の味の更なる改善。

ばおり餅・よもぎ餅作り・ホタテ貝の開き方体験④

評価

・出来立てのよもぎ餅やホタテの刺身、貝焼きはとても美味しかった。
　＝東京都心では滅多に食せない。
・かっちゃたちの優しさから脇野沢らしさを味わうことができた。
　⇒人と関わることの楽しさ。
・地域住民との会話。
　⇒地域らしさの発見。
　⇒旅行者の好奇心を刺激すること。
　⇒旅の醍醐味。

ばおり餅・よもぎ餅作り・ホタテ貝の開き方体験⑤

提案

・観光資源への発展に向けてハード面とソフト面の整備。
　ハード面‥ある程度の人数が収容できる施設の確保。
　ソフト面‥より充実したプログラムや、きめ細やかな対応、それを観光商品として売り出すことに対する前向きな姿勢の確立。

アニマルトラック①アニマルトラックとは

- アニマルトラックとは
  ・足跡を観察してその動物の名前を知り、その生態を学ぶものである。
  ・脇野沢YHの磯山さんに案内いただいた。
  ・北限に住むニホンザルを間近で観察できる。

アニマルトラック② 行程

- 19日夜動物の生態や足跡を座学にて学ぶ
  ↓
- 朝、愛宕山公園へ出発
  ↓
- 愛宕山でニホンカモシカを観察
  ↓
- ニホンザルの群れを観察
  ↓
- 牛の首農林公園でかんじきを履き山林を散策

アニマルトラック③長所

- 運が良いと野生動物を間近で観察できる
- YHの磯山さんによる事前学習により、動物への興味がわき、生態も理解した状態で山を散策できる。
- 牛の首農村公園からの眺望がとてもよかった
- YHの内装がおしゃれであった
- 宿泊費が良心的であった
- YHのペアレントが温かかった

アニマルトラック④ 要望

・集客力を十分にもっているモノなので、もっと全国にアピールすればいいと思う。
・アニマルトラックという性質上大人数のお客さんを呼び込むことは不可能であり、磯山さんしか案内人がいないという状況も課題の一つであると思う。

アニマルトラック⑤　提案

- 自然を間近で味わえ、動物の生態を学べ、普段都会で生活する者からしてみれば貴重な体験ができる
  ↓
- 十分な観光資源になるうる。
  ↓
- しかし、それは自然界と人間界のバランスを崩しかねない。
  ↓
- 動物たちの生活様式を崩さないよう努力しながらアニマルトラックという観光資源を活かし、大消費地へアピールしていったほうが良いと思う。

釜臥山スキー場①

下北最大のスキー場で、陸奥湾を臨む立地にある。

釜臥山スキー場②

長所
- ・陸奥湾に向かった眺望が最高だった。
- ・コースが長い。

短所
- ・バス停から遠い。
- ・ロッカーがないなどセキュリティ設備があまい。

釜臥山スキー場③

評価
- ・景観は言うことなし、まさに絶景。

提案
- ・交通の不便の解消。
- ・他の観光資源との抱き合わせ。

脇野沢を更に盛り上げるためには！？

私たちが考える2つのキーポイント

- 「脇野沢ならでは」の体験ができる
- 「脇野沢ならでは」の交通機関の確立

脇野沢ならではの体験ができる

例えば‥
- ・郷土料理
- ・自然が豊富
- ・人との出会い‥のような体験

↓

「脇野沢ならでは」を学ぶことのできる観光の提案

⇒さらに「脇野沢ならでは」の交通機関の確立へ

交通「脇野沢ならでは」の交通機関の確立

各観光スポットが離れているという課題
→新たな交通機関の確立は必須

「脇野沢ならでは」をプラスすると‥
例えば
かっちゃたちが案内人として、各スポットを回る巡回バスなど

最後に‥

訪れた各地で温かく迎えて下さり、
本当にありがとうございました！！

3班

下北地域冬季体験型観光資源調査報告　第3班

小澤寛樹
荒井順也
古関達大
山下貴子

1．はじめに

- 1日目
そば打ち　もちつき踊り　バター作り　酪農体験
- 2日目
自治体体験　川内漁協（ナマコ・ホタテガイ加工体験）

2-1．そば打ち体験

- 東通村大利生活改善グループの方々に指導していただき各々がそば打ちを体験。

2-2．もちつき踊り

- 東通村の伝統芸能「もちつき踊り」を体験。今のところ、一般観光客が体験することはできない。

2-3．バター作り体験

- 家庭でも手軽にできるバター作りを通して、牛乳の成分や殺菌方法について学ぶ。

酪農体験

2-4. 川内漁協での体験

- ナマコの加工やホタテガイのほやき方などを体験。

3. 行政関係ヒアリング

- 下北地域県民局にて行政側からの視点で、下北半島の観光資源について聞き取り調査。

4. 体験調査を通して(1)

- 下北での移動に際してレンタカーの存在は不可欠であると感じた。
- 大学生は観光の足となる交通機関の便数が少ないと行きたい気持ちを諦めてしまう。

⇩

- 若者が観光地に行くための移動手段の改善が必要。

体験調査を通して(2)

- 一つ一つの体験プランとしては下北らしさや、若者にはインパクトにかけるという印象がある。
- 下北の特色が曖昧になってしまっていて、素材をうまく活かしきれていないのではないか。
- ただし個々のプランの中には若者をひきつける可能性を秘めたものが存在する。

⇩

- これらのコンテンツをうまく組み合わせ、PRすれば、下北に若者が興味を示すのではないか！

5. 提案

- 下北限定「海軍コロッケ」をご当地限定で露天販売などを検討してみる(ソウルフード定着)
- 現在使われている移動手段のメリットを生かす
- 観光拠点となるむつ市にみやげ物屋や伝統料理屋を展開するなど施設の充実
- 訪れる人の為に料理店や土産店などのマップを作る(地元住民のおすすめ店を募集・ご当地ラーメンマップなど・・・)

私たちの班が興味を示すもの

- 「本州最北端の地」のイメージ
  ⇒厳しさ、寒さ、荒波、・・・
  ＝刺激的なもの！？(みてみたいー！！)
- 地理的条件を生かした観光資源の開発
  ⇒「本州最北端の地」は1つしかない
- 「**一球入魂**かぼちゃ」と「**十割**そば」から野球が連想された。これには必勝のイメージを持ち、下北で食べてみるインセンティブになる。「*北れ　挑戦者*」。

6. 提案する観光プラン

地理的条件から

- 地吹雪ツアー
- 津軽海峡荒波ツアー
- 雪山探検

オプション

＋温泉
海産BBQ
その他ご当地土産

PR方法の案

- 下北ハロウィン祭り（かぼちゃ祭り）
- 下北雪祭り

⇒ 大々的にイベントを行い地域の目玉に

7. おわりに

- 私たちは調査を通して、以上のように感じました。
- 下北には潜在的な良いところがあり、若者も興味を持っています。
- 下北には「いいもの」があるので、それを生かせば、若者が取り込めるのではないでしょうか。

３）首都圏シンポジウムの準備・開催・とりまとめ（開催地：東京都内）

首都圏大学生との交流事業成果報告会（シンポジウム）in 首都圏　要旨

■ 日　時：2008 年３月８日　14:30～
■ 場　所：財団法人地域開発研究所会議室
■ 発表者：法政大学学生、立正大学学生、高崎経済大学学生

○式次第

１．開会・局長挨拶　青森県下北地域県民局長 奈良岡修一氏
２．冬季における体験・交流観光調査の趣旨説明＆参加学生の紹介
３．各班の発表（３班・各班35分、コメンテーター・会場との質疑含む）
４．総括　青森県下北地域県民局長 奈良岡修一氏
５．閉会・挨拶　青森県下北地域県民局地域支援室　主幹 宇野　貴氏

○学生発表要旨

１班：河野康乃、田中里絵(法政大学社会学部 2 年)、高橋紘子(同 4 年)、
菊池恵美(現代福祉学部 2 年)

●提案

下北の魅力を外部により発信していくための提案

・視覚資料の充実

一般に、人が旅行や観光から帰ってきたとき、その思い出をより鮮明に浮き上がらせるものと言えば、現地で取った写真や、パンフレットなどの視覚資料である。今回は、視覚資料がとても少なかった。

・観光案内や手順説明

今回不足している面があると感じた。完全なマニュアル通りではなく、行き当たり的なものでもなく、両者のバランスを上手く取ったガイドや説明を、実施者側には模索して欲しい。

・最低限の設備の整備

最も急務だと感じるのが、最低限の設備の整備である。特に言えるのが下風呂温泉郷の清潔なトイレやドライヤーは、若者層を呼び込もうとする上では必要不可欠である。

また、冬という季節に関して言えば、暖かな暖房設備も充分にされるべきであろう。温泉郷は地元の方々の憩いの場として普段利用されているのかもしれないが、観光客をはじめとする外部の者の受け入れも現時点ですでに行っているわけであるから、脱衣所での安全面などの細かな配慮が求められると言える。

・地域のバックアップ

今回の体験で非常にお世話になった生活改善グループは、地元で頑張る女性のパワーを体現化したものであると言えよう。これからの下北にとって欠かすことのできない存在だということを短い体験の中でも強く感じさせられた。

しかし、生活改善グループそれだけでは、おそらく今後乗り切ることのできない事態も出てくると思

われる。例えば、べこもち作りで丁寧なご指導を下さったこすもすの家生活改善グループは、メンバーの方々がご年配ということで、パソコンなどによる資料作りといったことは今現在もなされてはいない。

このため、今後、生活改善グループをサポートする存在や、そうした地域全体での取り組みが必要とされるだろう。

・雪の魅力

最後に、首都圏に暮らす者にとって、雪は非常に魅力的な北の資源である。今回の体験では、雪を利用した幻想的な演出などを見ることはできなかった。少ない雪でも、できることはたくさんある。大仰なものでなくても良いのだ。

個人宅ごとでできるような、小さな演出でも全く構わない。首都圏に暮らす者にとって、それほどまでに雪は貴重で魅力的なものなのである。下北の方々にはぜひ、雪という自然資源を活用し、若者へのアピール材料として発信して欲しいと思う。

●意見交換・コメント

・マグロ丼の美味しさをもっと伝えてください
→マグロ丼だけではなく、味噌汁など大間で取れたもので作られた食事は大変おいしかった。東京では食べられない。
・短所を改善するよりも、長所を伸ばして不便であるが、行きたい場所にしていくのも重要だと感じた。
・観光客を受け入れたいならば、案内表示をきちんとすべきだと思う。
・わいどの家は私も泊まったが、とても心地のよい空間であった。ツアーでは無理だが少人数であれば良いと思う。
・具体的にどのように案内表示をすればいいのかを提案してくれると、よりよかったと思う。
・大間に行く前と行ったあとではイメージが変わったか？
→行く前は「まぐろ」、行ったあとは「元気なかっちゃ」たちや、かっちゃの案内によって、普通の漁港が魅力あるものに変わった。見晴らしの良い場所へ連れていってもらったことにより、自然や風景に感動した。
→意外と寒くなかったので、首都圏の若者でも大丈夫なのではと思った。
・大間へは「入口としてのまぐろ」があるので、導入として上手に活用できると思った。
・本州最北の地は大間にしかないので、それは十分魅力的である。
・北海道との連携も考えていけばいいのではないか。
・私にとっては東京の方が不便。３週間分ぐらい今日一日で歩いた気がする。
・学生だけでなく、他の世代に聞いても似たような意見が聞かれる。
・下風呂温泉の例、「ドライヤーがない、でも素朴で良い」という意見が多い。果たしてどちらなのか？
→地元密着はよい、でもドライヤーがあれば嬉しい。小さな所を見直すだけで全体の魅力が増すと考えられる。大きく変えてしまのはよくない。でもバランスが難しい。
→今回はバスの時間もあり、髪の毛を乾かすのにストーブを使った。ドライヤーを貸し出してくれるだけでもいい。
・ドライヤーがなかったからここまで盛り上がれたというのも事実。整備と素朴さのバランスは難しいと思う。
・いろいろな問題点を挙げてもらったが、全てクリアーした場合、友人を連れてきてくれるか？
→クリアーできれば、沖縄や北海道と同じくらいの魅力があると思う。

→最低限クリアーできれば、連れてきたい。わいどの家がよかったので私はそう思う。

2 班：佐藤怜奈、関根綾子、藤山良(法政大学現代福祉学部 2 年)、
田花康志郎(立正大学地球環境科学部 2 年)

●提案

正直なところ、脇野沢を訪れる前までそれぞれの体験内容に地味なイメージしか持つことができなかった。そのため、どれだけ楽しめるのかという不安があったことも事実である。しかし、体験を終わった今、それぞれに相応のお金を出す価値はあったと強く感じている。

・地元の人とのふれあいを通じて遊びながら学べる

小学生から大学生まで幅広い世代の学習の場として脇野沢を提供するという案を提案する。私たちの脇野沢での体験メニューは、観光商品として売り出すには、大人数の観光客を受け入れられない、ある程度体力がいる、地味であるという印象は拭えない。

しかし、それぞれの場所でその分野のエキスパートと交流することで、地味なイメージを払拭し、その体験に対しての興味や楽しさが生まれてくることは確かである。このような体験メニューは単なる観光にとどまらず、学習という要素も含まれているのではないだろうか。

具体的に、小学校の自然教室を始め、大学のゼミ合宿など比較的少人数であれば受け入れることも可能であると思う。そうすることで、都市部の若年層を呼び込むことも期待できる。

さらに今後、このような観光を模索していくならば、学習という特色をより前面に押し出していくために何をすれば良いのか。その例を以下に挙げてみる。

・脇野沢の水産業に関する事前学習会などを行う（クロソイ餌やり）。
・今回、体験した３種類だけではなく、より充実したプログラムや作業工程の確立をすることが望ましい。また、地元住民が郷土料理やその地域に関する話などをする（ばおり餅・よもぎ餅作り、ホタテ貝の開き方体験）。
・現在、案内人を務めている磯山隆幸さんを中心に案内人の充実を図る（アニマルトラック）。

このような要素を取り入れることで学習面の強化ができ、観光客と受け入れ側の距離が縮まることが予想される。

・交通の不便さを逆手にとる

東京から脇野沢までの交通費を考えると学生には手が出にくい。さらに、1 時間に 1 本のバスという不便さでは学生に限らず、多くの観光客に敬遠されてしまう。

しかし、地元の方々は下北の現在の交通事情に不便さを感じていないという意見。

実際、私たちも地元の方々が日常生活で使用する路線バスに一緒に乗り込み、耳慣れない下北弁を聞きながら見知らぬ土地に来たのだという旅独特の高揚感を感じたことも事実であった。現代社会の都心で生活する私たちは特に過剰なまでの便利な世界で生きている。そのように感じるとともに、のんびりとした路線バスの魅力に改めて気づかされた。

現実問題としても新たな交通機関の設置というのは難しいので、私たちはむつ市内から脇野沢までの道のりは、現地発表会での提案を、路線バスを活用する提案に変更した。

しかし、観光客向けに本数をすぐに増やすことは不可能であると思うので、まずは 1 日乗車券の発売

などで観光客の交通費を抑えて観光客を増やすように仕向けるのはどうだろうか。利用客が増えれば、路線バスも本数を増やすことが可能だろう。このようにして、脇野沢までの道のりは路線バスというツールで「下北の風」を観光客自身に感じてもらえるようにする。

・地元の方々が案内する周遊ワゴン

私たちは脇野沢に到着後の移動は、各体験でお世話になった方々に送迎していただいた。その車内での会話が地元の人と観光客の距離を縮めるのに有効な手段であると考えた。地元の人には些細な日常の出来事の話は、この地域を選択して観光しに来た人たちにとっては、興味深く嬉しいことである。つまり、住民にとってはどんなに小さなことでも旅行者から見ればどれもが珍しく、楽しいことである。そこで、地区内の移動は公共交通機関ではなく、可能であれば地元の方々が運転する車で移動したいと感じた。

例えば、かっちゃたちが案内人として各スポットを回る周遊ワゴンを提案したい。かっちゃという明るく、親しみやすい方々を観光客の身近に置くことによって「脇野沢らしさ」を観光客により感じてもらえるだろう。

以上が私たちの考えた脇野沢地区の観光事業に関する提案である。これらの提案には現実的に不可能なことも含まれているかもしれない。そして、脇野沢に住む地域住民の方々の協力がなければ成立しないものも多々ある。そのようなことを踏まえ、また、地域住民を大切な観光資源のひとつと考えるならば、彼らとの十分な打ち合わせが必要になってくるだろう。自然や人々の暮らしから感じることができる「脇野沢らしさ」を壊さず活かせるような観光地化を是非とも勧めていただきたい。あまりに不便過ぎては観光客が脇野沢まで来てくれないだろうが、多少の不便さは残し、段階を踏みながら「観光地・脇野沢」を目指して欲しいと思う。

●意見交換・コメント

・下北の冬の観光は弱い。夏にスキーの代わりにマリンスポーツを入れて、同じような体験メニューを組んだ場合、夏に来るか、冬に来るか？

→夏：陸奥湾を泳いで横断したい。トライアスロンの大会を開けば話題になるのではないか。だから夏が良い

→冬：最初は地味に感じたが、体験してみると冬の脇野沢ならではのものが体験できた。ここでしかできないことがあるので、冬が良い

・トライアスロンや大会などは面白い提案だと思う。

・土産物屋の話が出ていたが、寂しい感じがしたのは、冬だからである。夏はうるさいぐらいにかっちゃたちがよってくる。こちらにすれば、冬場に開けているだけありがたい。

・交通費の問題は、距離感の違い。むつの中心部から脇野沢まで 50～60km 離れている。

・フリー乗車券は需要の問題がある。増えれば可能性が出てくる。皆さんも友達を連れてきてください。

・イメージがわいてこなかった。クロソイってなに？

→私たちも餌をあげただけ。事前レクチャーがあればよかった。

・私も体験ツアーを企画して首都圏のお客様を連れてアニマルトラックをやった。その時は楽しかったし感動した。感動する気持ちは年齢に関係ない。

・いくつかの要望が出ているが、私もそれを感じた。早急に改善してほしい。

・若者にとって交通費は高い。「遠いから仕方がない」のではなく、受け入れる気持ちがあるならば、折り合いをつけて「来やすい金額」にする必要があると思う。

・焼干しラーメンはおいしかったか？
→ご当地ラーメンで期待していたが…
・クロソイが食べられなかったのは、もったいなかった。食と組み合わせが必要と感じた。
・自分が学生の頃、ドライヤーは持っていったものであった。今は違うということがわかった。このような感覚は大事だと感じた。

３班：小澤寛樹(高崎経済大学経済学部２年)、荒井順也(立正大学地球環境科学部１年)、古関達大（同2年)、山下貴子（法政大学社会学部２年）

●提案

全ての体験を通して冬の下北観光について考察したい。私たちが注目するのは、（１）交流のある体験プラン、（２）探究心を満たす体験プラン、の２つである。

・交流のある体験プラン

そば打ち体験を例に取り、詳しく見る。そば打ち体験で、私たちは交流の意義に注目している。私たちがそば打ち体験全体を通して楽しいと感じたものは、そば打ち自体というよりも、初めて訪れた地域の方との交流であったのではないだろうか。

さまざまなお話を通して、下北の生活がどのようなものなのか、ブルーベリーはどのように育てているのかなどといった、そば以外の生産物について、些細な話ではあるが沢山興味深い話を聞くことができた。

その情報自体というよりも、楽しい雰囲気に暖かさを感じ、それが楽しかったのだと思う。単なる観光プランにはない良さであったと思う。多くの観光客を受け入れる体制を整えることを目指すのではなく、少人数の体制だからこそ現れる魅力かも知れない。もちろん観光客全員が地域の方との交流を求めているわけではなく、「なるべく人とかかわりたくない」という意見も多分にあるであろう。

しかし、この交流を貴重で特別なことだと、魅力に感じる学生がいることも確かであるということはここに明示したい。

また、バター作りや酪農体験でお世話になった原さんは、酪農のみならず日本農業に関し高い問題意識を持っておられ、これからの農業の話にとても心打たれた。また、川内漁協の皆さんとの交流も大変印象深いものがあった。漁協に行く機会もなかなかないので、ホタテガイが水揚げされる様子や、働く様子を見せていただいたことも良かったし、ホタテガイを炭で焼きながら、そのまわりを囲んで話をして、下北の方言などについて伺うこともできたことがとても楽しかった。

交流するために旅行に来るという人はいないかもしれない。しかし、私たちが今回の体験で共通して印象に残ったのは、地元の方々との「会話・交流」であり、それがこの体験をより特別なものに感じさせたと考える。これを観光プランの良さに、反映できはしないだろうか。

・探究心を満たす体験プラン

私たちは、今回の体験プランに対し、これまで述べてきたような様々な魅力を感じた。しかし、実際に自分でお金を払って下北まで体験しに来たいと思えるのかという課題が残る。この調査の下北発表会後の地元の方々とのディスカッションにおいても、「実際に若者は下北に来たいと思うのか」、「旅行に関する費用は、いくらまでなら出そうと思えるのか」等の疑問を抱いている方が多かった。

ここから感じたことは、下北に若者を呼び込むためには、何か強い「目的」提示が必要ではないかと

いうことである。ここで言う「目的」とは、例えば今回の私たちの調査のように、課題が提示されている目的ではなく、各人の自主的な興味関心にもとづく探究的な「目的」である。そのためには、下北に行く意義や魅力、すなわち「目的」を見つけられなければ、首都圏からの距離がある下北へ足を運ばないだろう。この「目的」が若者の求めるもの（若者の探究心）と合致していれば、魅力ある下北観光が成り立つのではないかと考え、「探究心を満たす体験プラン」というキーワードを挙げた。

・想定される観光プラン

下北には様々な素晴らしい産物と、本州最北端というネームバリュー、特に冬となれば寒い、厳しいなどのイメージも湧きやすい場所であると思う。ここから、どのようなプランが考えられるであろうか。

(a)「地吹雪ツアー、津軽海峡荒波ツアー、雪山探検」

少々唐突で現実的ではないかも知れなが、「最北端」、「寒さが厳しい」というイメージ、最北端という地理的条件を生かしたものである。刺激的な響きのものは、見知らぬ土地への探究心がくすぐられるという意見が出た。

実際には雪は少なく、このような体験はできないという意見をディスカッションでもいただいたが、関東に住み雪に触れる機会が少ない私たちにとって、雪はあるだけで魅力的である。また、これらに温泉や地元の海産物を自分で焼いて食べることができる（海産 BBQ）等のオプションがついていたら、若者向けの楽しいプランとなるのではないか。

(b)「必勝祈願ツアー」

さまざまな産物を見て気になったのは、「一球入魂かぼちゃ」のネーミングである。一球入魂とは高校球児を連想させる単語である。ここに「十割そば」と「願掛岩」も合わせ、野球のイメージを固めたツアーはどうだろうか。

遊んでいるような企画であるかもしれないが、このように産物を組み合わせて面白く生かすことで、必ずしも若者に合うものになるとは限らないが、お互いの意外な魅力が結びつき、話題性のあるプランとなりうる可能性もある。

また、このような面白おかしいものとは異なり、就業やインターンシップなどの「目的」の提示も、若者を呼び込む手段となるであろう。これはディスカッションおいても議論となった問題だ。この場合の「探究心」は、働くことや、地元の方との交流にあるだろう。

下北には一つ一つは小規模かも知れないが、様々な良い産物が豊富にあるという印象を受けた。下北で就農、就業体験、ワークショップなどを積極的に実施すれば、さまざまなバラエティに富む体験プランが提示できるのではないだろうか。しかも、このような体験希望者にとって、交通の便が少々悪いことや、施設の不便さなどはほとんど気にすることはないと思う。「田舎に行ってみたい」、「遠くへ行ってみたい」と最初から「下北のような」場所を求めてくる若者は、探せば必ず集まるのではないかと思う。

このように、求めるものの違いは個人によって異なるが、下北の魅力をうまく抽出できれば、面白いプランがたくさんできるのではないかと感じた。観光プランを考えるときに問題点がないわけではない。交通費の問題、学生向けの格安パックが作れるかどうかといった費用面での問題、駅前が寂しい、飲食店が少ないといった不満の意見などの、ハード面からソフト面まで様々な問題は挙げられる。

しかし、どんなに価格が安くても、便利な施設が充実しても、やはり「来たい」と思う何かがなければ来ない。私たちは、沢山の下北の方々と交流できたことで、下北での旅を特別に感じることができた。「来たい」と思ってしまったら、多少の交通の問題など関係ないとも考えられる。また、あえて冬に行くということでとても話題になり、かえって貴重な体験ができたことを嬉しく思っている。

●意見交換・コメント

・特産品を売り込む際に「ストーリー」を盛り込むことが重要だが、蕎麦打ちやもちつき踊りなどで、そのあたりの「ストーリー」が語られていなかったのが残念である。
・県民局でのヒアリングで、「観光振興は行政主導ではなく民間主導」とあったが、当を得たコメントだと思う。
・男性ならではの視点で興味深かった。
・「海軍コロッケ」は、若者の興味をひくかもしれない。
・なまこの体験や一球入魂カボチャに注目するなどの視点が面白かった。
・「必勝祈願ツアー」はすぐにでも企画したい。
・川内＝なまこのイメージが出来上がった。キャラクターを作ると「ゆるキャラ」で売れるかもしれない。
・行く前から期待はしていたか？
→地味かと思っていた。
・行ってみれば面白いことが多い。なので「とっかかり」が大事。
・海軍由来の地域と連携して売り出すなにかがないのか？
・最後の落としどころとして「必勝祈願ツアー」というのがあると思い知らされた。
・交通機関の不便さの話がなかったが…
→タクシーでの移動であった。効率よく移動するには、また 4 人での移動ではタクシーの利用もありだと思う。
→首都圏から来ると、雪道の運転が不安なのでレンタカーは厳しいと思う。

○首都圏での発表会資料（パワーポイントおよびレポート）

１班

下北地域冬季体験型観光資源調査

１班（大間町・風間浦村コース）

河野　康乃
菊池　恵美
田中　里絵
高橋　紘子

大間町

大間町①

- 下北駅9：10発→大間崎10：52着
- エスコートクラブ（OEC）の出迎え

※OEC・・・Oma Escort Club(大間エスコートクラブ)

・最北端の地で写真撮影
・土産屋でショッピング
・展望台で360°のパノラマ津軽海峡
・漁港見学
・マグロ丼を食す

- 「べこもち」づくり体験

・こすもすの家生活改善グループによるべこもち作り体験

大間町②

魅力

・エネルギッシュなかっちゃ達【OEC、こすもす】
・おいしいマグロ丼【OEC】
・4社の旅行会社との契約【OEC】
・伝統を学ぶことができる【こすもす】
・べこもちをその場で食べられる【こすもす】

改善点

・金額【OEC、こすもす】
・食事をする場所【OEC】
・土産屋が入りづらい
・時間の余裕がほしい【こすもす】

大間町～提案～

- 使われていない施設の活用【OEC】
- 視覚資料を取り入れる【OEC、こすもす】
- 土産屋との連携（OECがお土産開発）【OEC】
- 手作りしたべこもちをお土産として（シールを貼る）【こすもす】

大間のかっちゃ達と、べこもち作って
感じた。
製造年月日　年　月　日
製造者
※保存料は一切使用しておりません。

風間浦村

風間浦村①

- 日和町16:09発→下風呂16:42着
- 下風呂温泉
  - ・入浴
  - ・散策

- 下風呂18:11発→易国間18:24着
  - ・わいどの家宿泊
  - ・わいどの木で木工体験（翌日）

風間浦村②

魅力
・地元の人がフレンドリー【下風呂、わいど】
・マニア向け【下風呂】
・わいどの家が感動、おしゃれ【わいど】
・大人数でも泊れる【わいど】
・ヒバのお風呂、カラオケ【わいど】
・自由な発想の木工体験【わいど】

改善点
・パンフレットとのギャップがありすぎる【下風呂】
・ドライヤー、シャンプーなどの備品について【下風呂】
・温泉？？女子大生向きではない【下風呂】
・作業服、軍手の連絡【わいど】
・詳しい説明が欲しい【わいど】
・泊まって体験か、体験して泊まるか？【わいど】

風間浦村～提案～

- 下風呂温泉をもう少し観光客向けに（今の素朴な状態を残しつつ）【下風呂】
- 宿泊→体験の流れでもわいどの家の方々とふれあえる何か【わいど】ex冬の天体観測、かまくら作り
- 雪の演出【わいど】

交通、その他の考察

- 2日間に要した　交通費：5,020円
  所要時間：3時間49分
- 道路片道にしかないバス停留所（明確な表示が欲しい）
- バス車内前方に表示される電工掲示板の表示形式が分かりづらい。
- 観光客向けの路線図、観光案内などの掲示

初めてそこに踏み入れた人でも，安心して身を任せられるような空間作りが，交通機関各所にも求められるべきである。

体験を終えて・・・・・・

全体を通して言えること

- 全体的に視覚資料が少なかった。（パンフレット、写真、パネルを使ってのガイドetc）
- 説明（マニュアル通りではないが、行き当たりばったりでもないガイド）
- 最低限の整備（清潔なトイレ、ドライヤー、暖房、安全）
- 生活改善グループを支える人々の力
- 雪の活用
- 交通→フリーパス券の導入

当日のスケジュール

1日目 （2008年2月19日）

2日目 （2008年2月20日）

お世話になった皆さん、

楽しい思い出を

ありがとうございました。(^_^)☆

2班

首都圏の大学と連携した首都圏の若者との交流推進調査
下北地域冬季体験型観光資源調査（2008年2月19～20日）

脇野沢地区を訪れて

Team under-North
佐藤怜奈
関根綾子
田花康志郎
藤山　良

下北地域冬季体験型観光資源調査（19日）における第2班の行程と費用

1日目	下北駅通10:46発 〈JRバス￥1,690〉 脇野沢12:09着 ○昼食 〈「食事処たいじま」にて「やき干しラーメン」￥650〉 ○クロソイ餌やり （脇野沢村漁業協同組合のご協力で） ○よもぎ餅・ばおり餅作り、ホタテ貝の開き方体験 （蛸田地区生活福祉センターにて 「つつじ生活改善グループ」のご協力で） 〈⇒上記2つのメニューで￥18,000（4人分）〉 ※脇野沢ユースホステルの車でユースホステルへ移動 ●宿泊：脇野沢ユースホステル 〈宿泊代・食事代（夕・朝・昼）・入浴料 ・暖房費・入浴料・アニマルトラック代込み￥5,770〉 ○脇野沢温泉 （脇野沢村保養センター） ○アニマルトラック事前学習

下北地域冬季体験型観光資源調査（20日）における第2班の行程と費用

2日目	脇野沢ユースホステル9:00発 ○アニマルトラック （12:00頃まで） 脇野沢12:55発 〈JRバス￥1,690〉 海上自衛隊前13:54着 〈徒歩約15分〉 ○釜臥山スキー場 〈リフト4時間券￥1,500〉 〈レンタルスキー一式代￥3,000〉 海上自衛隊前発 〈JRバス￥340〉 下北駅通着 ●プラザホテルむつ着

クロソイ餌やり①　クロソイとは

・メバル科の黒い魚である。
・脇野沢では昭和58年からクロソイの養殖を始めている。
・脇野沢の特産品のひとつとして知られている。

クロソイ餌やり②　行程

- 脇野沢漁協到着
  ↓
- 港へ移動
  ↓
- ひらめ丸で養殖場へ
  ↓
- 餌やり
  ↓
- 港へ戻る

クロソイ餌やり③

長所
・漁船に乗ることができる。
・養殖の仕事の一部を知ることができる。
・地元の漁師の方々と交流することができる。

要望
・餌やり体験に関して事前説明がなかった。
・上記と併せて、クロソイについての説明がなかった。
・餌やりだけではなく、実際にクロソイ料理を味わいたかった。
・漁師の方々に、この体験を観光商品として受け入れられる体制があるのか。

クロソイ餌やり④　まとめ

- メインの餌やりは珍しい体験であり、首都圏の若年層が楽しめる体験である。
  →より良い観光商品にするためには？

- メイン＋αの企画を作る。
  ・漁協の方々による講習
  ・クロソイ料理を味わう
- 観光客を受け入れられる体制をつくる。

ばおり餅・よもぎ餅作り、ホタテ貝の開き方体験①

ばおり餅・よもぎ餅作り、ホタテ貝の開き方体験②

長所
- ・地域住民と直接関わることができる。
- ・直接関わりを持つことによって、実際の生活の様子などを知ることができる。
- ・自分たちで作った郷土料理をその場で温かいまま食べることができる。
- ・自分たちでホタテ貝を開き、刺身を食べることができる。
- ・何よりもかっちゃたちが優しかった。

要望
- ・大人数でも対応できるのか。
- ・場所の確保は可能なのか。
- ・機械ではなく自分たちの手で餅をつくことから始めたい。
- ・作業工程の組み立てができていない（ホタテ貝の開き作業に手間取ってしまったため、ばおり餅が冷めてしまったなど）。
- ・ばおり餅の味の更なる改善。

ばおり餅・よもぎ餅作り、ホタテ貝の開き方体験③

評価
- ・出来立てのよもぎ餅やホタテの刺身、貝焼きはとても美味しかった。
  ⇒東京では滅多に食せない。
- ・かっちゃたちの優しさから脇野沢らしさを味わうことができた 。
  ⇒人と関わることの楽しさ。
- ・地域住民との会話。
  ⇒地域らしさの発見。
  ⇒旅行者の好奇心を刺激すること。
  ⇒旅の醍醐味。

ばおり餅・よもぎ餅作り、ホタテ貝の開き方体験④

提案
- 観光資源への発展に向けてハード面とソフト面の整備。

ハード面‥ある程度の人数が収容できる施設の確保。

ソフト面‥より充実したプログラムや、きめ細やかな対応、それを観光商品として売り出すことに対する前向きな姿勢の確立。

脇野沢ユースホステル・アニマルトラック①

アニマルトラックとは
- ・足痕（ほ乳類は四肢で歩くので、両手両足4個一組の足痕）を観察してその名を知り、足跡（長く続く一連の足痕）を観察して生態系を創造する。そして、冬の森を体験するものである。
- ・脇野沢ユースホステルの磯山隆幸さんに案内していただいた。

脇野沢ユースホステル・アニマルトラック②

行程

第1日目夜、動物の足跡や生態を座学にて学ぶ

↓

翌朝、愛宕山公園へ出発、
そこでニホンカモシカを観察

↓

ニホンザルの群れを観察

↓

牛の首農村公園で
かんじきを履き、山林を散策

脇野沢ユースホステル・アニマルトラック③

長所

- 宿泊費が良心的であった。
- ユースホステルの内装がおしゃれであった。
- 前夜の事前学習があることによって、動物たちの生態を予習できる。
- 運が良ければ、野生動物を間近な距離で観察できる。
- 牛の首農村公園の頂上からの眺望が良かった。
- 愛宕山から見ると動物たちの生活場所がよく分かる（人間界と自然界が共存しているということが分かる）。
- ユースホステルのベアレンツが温かかった。

要望

- 洗面所でお湯が出ない（ユースホステル）。
- 布団・毛布が薄く、寒かった（ユースホステル）。
- ドライヤーが置かれていない（ユースホステル）。
- 地元の方々を対象としていて、観光客を呼ぶことができるような施設ではない（脇野沢村保養センター）。
- 大人数では体験不可能である（アニマルトラック）。
- ガイドとなる方は隆幸さんの他にいらっしゃるのか（アニマルトラック）。

脇野沢ユースホステル・アニマルトラック④

提案

自然を間近で味わうことができ、貴重な動物たちの生態を学べ、日常を都心で営む者にとって興味深い体験ができる。

⇒十分な観光資源になり得る。

⇔現在の自然界と人間界のバランスを崩しかねない。

⇒動物たちの生活様式や自然をように注意をしながらアニマルトラックという観光資源を活かして首都圏へのアピールをして欲しい。

釜臥山スキー場 ①

下北最大のスキー場で、陸奥湾を臨む立地にある。

釜臥山スキー場 ②

長所

- 陸奥湾に向かった眺望が最高だった。
- コースが長い。

要望

- バス停から遠い。
- ロッカー、更衣室がないなどセキュリティ設備がない。

釜臥山スキー場 ③

評価

- 景観は言うことなし、まさに絶景。
- 大型スキー場ではないので多くのスキー客を取り込むのは難しい。

提案

- 交通の不便の解消。
- 他の観光資源との抱き合わせ。

まとめ①

脇野沢を盛り上げるための
私たちが考えた3つのキーポイント

- 「脇野沢ならでは」の体験学習ができる。
- 「脇野沢ならでは」の交通機関の確立。
- 「脇野沢ならでは」の
  スローライフ。

まとめ② 「脇野沢ならでは」の体験学習ができる。

例えば‥
・自然
・郷土料理
・地元の人々との出会い
‥のような体験

⇒「脇野沢ならでは」を地域住民から学ぶ。
⇒「地元の人とのふれあいを通じて遊びながら学べる」観光の提案。
⇒学習面の強化のためには？

まとめ③ 「脇野沢ならでは」の体験学習ができる。

学習という特色を押し出すために‥
・脇野沢の水産業に関する事前学習会などを行う(クロソイ餌やり)。
・今回、体験した3種類だけでなく、より充実したプログラムや作業工程の確立をすることが望ましい。また、地元住民が郷土料理やその地域に関する話などをする(ばおり餅・よもぎ餅作り、ホタテ貝の開き方体験)。
・現在、案内人を務めている磯山隆幸さんを中心に案内人の充実を図る(アニマルトラック)。
⇒学習面の強化。
⇒観光客と受け入れ側の距離が縮まる。

まとめ④ 「脇野沢ならでは」の交通機関の確立。

むつ市街地～脇野沢
交通機関の不便さ(東京からの交通費の高さ、1時間に1本程度の路線バスなど)。
→現実的に不可能な解決法(交通費を下げる、新たな路線の配置など)。
⇒そこで、逆に不便さをアピールする。
→地元住民の日常と同じペースで旅をすることでの発見(車内での耳慣れない下北弁など)。
⇒旅独特の高揚感を味わうことができる。
提案
ただし、高い交通費の問題は拭い去ることができないので、1日乗車券や旅行中乗車券などの導入により、観光客の負担を軽減し、利用客の増加を図る。
⇒将来的に、路線バスの本数が増えることを期待する。

まとめ⑤ 「脇野沢ならでは」の交通機関の確立。

脇野沢地区内
各体験でお世話になった方々の送迎。
→車内での会話＝旅人の興味・関心
⇒事前学習に近いもの＝体験学習の一環
提案
かっちゃたちが案内人として同乗し、各スポットを巡る「周遊ワゴン」の確立。
→「かっちゃ」という明るく、親しみやすい方々を観光客の近くに置く。
⇒「脇野沢らしさ」を旅行者に感じてもらう。

まとめ⑥ 「脇野沢ならでは」のスローライフ。

下北における成果発表会のディスカッションから地域の人々にとって、下北の交通の不便さを実感していないことが分かった。
⇒私たちが考える不便さも含めての「下北半島」であり、「脇野沢」である。
⇒そのスローライフを首都圏にいる人たちにとっての商品へ。
⇒スローライフを「下北の風」として旅行者たちに届くように働きかける。

脇野沢の自然・地域住民を大切に、
また、それらを脇野沢の貴重な観光資源のひとつと位置づけて
「温かい観光地・脇野沢」を目指していただきたい。

最後に・・

訪れた各地でとても親切に私たちを受け入れて
下さった下北半島に住む全ての地域住民の皆さま、
本当にありがとうございました。

ご静聴どうもありがとうございました。

3班

首都圏の大学と連携した若者との交流創出事業　第3班報告

小澤寛樹
山下貴子
古関達大
荒井順也

1．はじめに

①2日間で行った体験の良い点と改善点を総合的に精査する。

②大学生の「わか者、よそ者、ばか者」の視点から、新たなプランの提案を試みる。

2．体験内容

- 1日目
  - そば打ち体験
  - もちつき踊り体験
  - バター作り体験
  - 酪農体験
- 2日目
  - 自治体体験
  - 川内漁協にて、ナマコ・ホタテガイ加工体験

2-1．そば打ち体験

- 東通村大利生活改善グループの方々に指導していただき各々がそば打ちを体験。

2-2．もちつき踊り体験

- 東通村の伝統芸能「もちつき踊り」を体験。今のところ、一般観光客が体験することはできない。

2-3．バター作り体験

- 家庭でも手軽にできるバター作りを通して、牛乳の成分や殺菌方法について学ぶ。

2-4. 酪農体験

- 牛に干草を与える体験。

2-5. 川内漁協での体験

- ナマコ、ホタテガイの加工などを体験。

3. 観光行政ヒアリング

- 下北地域県民局にて行政側からの視点で、下北半島の観光資源について聞き取り調査。

魅力的であると感じた取り組み

①かぼちゃの1株1果どり栽培の取り組み

②観光農園「ブルーベリー農園しもかわ」の取り組み

③海軍コロッケの取り組み

4. 体験を通して～問題提起

- 体験そのものは楽しく、貴重な経験となった。
- 下北には、「いいもの」が隠されていた。

⇕

- 「楽しい体験」すなわち「観光資源としての可能性」ということではない。
  ⇒冬季の下北でしかできないことなのだろうか？

5. 提案～観光プラン(1)

地理的条件から	オプション
・地吹雪ツアー ・津軽海峡荒波ツアー ・雪山探検	＋温泉 海産BBQ その他ご当地土産

⇒ 「下北のイメージ」と「下北にあるいいもの」を組み合わせる。

提案～観光プラン(2)

下北名物
- 一球入魂かぼちゃ
- 十割そば
- 願掛岩

連想されるイメージ
＋野球のイメージ

Ex.「必勝祈願ツアー」
～北れ、挑戦者。本州のてっぺんへ～

「下北名物」と「連想されるイメージ」を組み合わせる。

6. おわりに

- コンテンツをうまく組み合わせ、若者の「探究心」に合ったプランの提示により、下北に興味を示すのではないか！